「多言語社会 台湾の「日本語人」に見られる言語混用と分析」研究会
2019 年 2 月 8 日

日台バイリンガルの言語使用における自己開示
－台湾の日本語人ナラティブデータをもとに－

元智大学応用外国語学科 林淑璋

1. はじめに

「自己開示」という言葉は、ジュラード（Jourard, S. M.）によってはじめて心理学用語として用いられ、個人的な情報を他者に知らせる行為であるとした。自己開示は自分がどのような人物であるかを他者に言語的に伝える行為であるとし、伝達の手段を言語に限定している（榎本 1997）。

本発表の研究目的は、台湾の日台バイリンガルのナラティブデータに見られる自己開示を調べ、実際言語使用における特徴を明らかにすることである。

2. 先行研究

自己開示の研究では、以下のようなトピックがある。自己開示の意義と動機、自己開示の効果・機能、自己開示の次元（広さ、深さ）、相手別自己開示度（身近な相手、性差、年齢）、文化差（集団差、異文化コミュニケーション）、パーソナリティ（自己評価、自我同一性）、性格特性との関連（外向性・内向性、親和欲求）などが挙げられている榎本（1997）。本発表では、日台バイリンガルを分析対象しているため、主に文化差に焦点を当て先行研究を紹介する。

一二三（2010）は、グローパル化の進んだ現在、異文化の者が出合い、自己開示を行う機会は増えてきている。同文化内の者同士でも細かい配慮を要する自己開示を、異文化の者が適切に行うためには、一層繊細な配慮を要すると指摘している。目黒・會澤・呉・黄・孟・孫（2017）は、異文化コミュニケーションの初期段階に頻繁に「自己開示」の様態があるとし、自己開示の仕方や内容などに対する違和感や誤解などは、今日のグローバル社会における多文化共生に影響を及ぼす問題であると述べている。

自己開示の文化差の研究では質問紙による研究が多い中で、実際の会話データを用いた研究として、奥山（2005）と全（2010）が挙げられる。奥山（2005）は日韓の同国人同士，同性同士の大学生の初対面場面で、話題の導入の仕方を時間に切って自己開示の量と質問形式に分けて分析している。一方、全（2010）は女性同士の日韓同国人が・初対面場面における自己開示の出現頻度及び開示内容を分析した。結果として、日韓の自己開示にみられる相違は両国の社会文化的規範の差によるものであることが明らかとなったという。

3. 本稿における分析対象と分析方法

自己開示の研究では、個人の情報を言語によって他者に伝える行為に焦点が当てられている。研究の方法には自己報告法（質問紙法)、観察評定表（面接法)、客観計量法（コンピューター法）といったものがあるが、質問紙法によるものがほとんどである。実際の言語使用において、自己開示はどのようにあらわれ、伝えられるかを調べる必要があろう（榎本 1997，pp. 9-10)。本発表は、日台国際結婚家庭に生まれた国際児、すなわち本発表のいうバイリンガルに行ったインタビューデータを分析資料とし、実際の談話の中に行われた自己開示を調べることにした。

分析に当たっては発話文を認定し、自己開示の項目内容をコーディングした。

発話文は、佐々木（1996）が日米女性の座談資料を分析するために用いられた発話文の認定基準にしたがい認定を行ったが、判定の重点を置き、「構文上から全体でひとつの結束性が見られ、意味のまとまりがある」内容を発話文とする。

自己開示の分析項目は、「自己」の範囲と自己開示の内容とに**大きく二つに分類した。**「自己」の範囲とは、自分自身に関することの「個人の自己開示」（例 3）と、自分と関連している者と関係することの「関係的自己開示」（例 4、例 5）と規定した。

例 3：因為我小學的時候，成績就滿好的。

例 4：因為我爸爸那一邊親戚大部分都是走醫療方面的職業。

例 5：她也是台日混血可是是在日本、的高中。

また、内容による自己開示の分類基準は全（2010）に従った。実例は本発表のデータから取り出した。

	記述的自己開示	評価的自己開示
基準	**情報・事実・経験などの客観的内容の自己開示**	**感情・気持ち・感想・評価などの主観的内容の自己開示**
実例	所以我從小學開始，盡可能就是，不要自己主動說	我是想去台北醫學大學
	高中的時候第一次成功。	我多少中文發音有，幾個字會很奇怪。
	他、他他在那個…他就是把我帶去安親班跟學校的時候。	我超、超喜歡、超愛日本。

4. 分析結果と考察

限られたデータによる分析ではあるが、記述的自己開示と評価的自己開示の出現頻度はインタビューの回数により変わるようである。IR と IE とが親しくなるにつれて、評価的自己開示の頻度が高くなった。そして、「個人の自己開示」「関係的自己開示」の出現頻度を比べれば、記述的自己開示において、両者の出現率の増減は大きな差がない。それに対して、評価的自己開示においては、IR と IE とが親しくなるにつれて、「個人の自己開示」の出現頻度が高くなり、「関係的自己開示」の出現頻度が少なくなった。

分析の結果から言えば、評価的自己開示の「個人の自己開示」は、自分のことを相手に知ってもらうためにより多く使われ、自己の確定化ととも、人間関係の促進としても重要な機能を果たしていると言えよう。

今後の課題として、分析単位の発話文と文字データ行替えの再確認、自己開示の内容項目の認定における一致率、バイリンガル研究に適用するような自己開示分析の枠組み、実際の言語データ分析にフォロアップインタビューまたはアンケート調査等を行る必要がある。

参考文献

石橋玲子（2009）「日本人学生と留学生の自己開示の変容」『留学生教育』第 14 号

榎本博明（1997）『自己開示の心理学的研究』北大路書房

小口孝司（1990）「自己開示動機に関する基礎的研究」『応用心理学研究』第 15 巻.

顧佩霊（2010）「中国と日本の大学生の対人関係における自己開示のあり方に関する比較研究」『九州大学心理学研究』第 11 巻

全鍾美（2010）「初対面の相手に対する自己開示の日韓対照研究」『社会言語科学』第 13 巻第1号、pp.123-135.

大坊郁夫・岩倉加枝（1984）「自己開示におけるパーソナリティと状況要因の役割」山形大学紀要(教育科学)8、101-127.

丹羽空・丸野俊一（2010）「自己開示の深さを測定する尺度の開発」『パーソナリティ研究』第 18 巻第 3 号、pp.196-209.

一二三朋子（2010）「自己開示の前提となる自己観に関する一考察－日本人大学生と中国人大学生の比較を通して－」『文藝言語研究. 言語篇』57 巻、pp.61-73.

目黒恒夫・會澤まりえ・呉正培・黄梅英・孟慶栄・孫成志（2017）異文化コミュニケーションにおける大学生の自己開示に関する比較研究—日中韓大学生の比較を中心に」『尚絅学院大学紀要』（74）、pp.45-61.

横田雅弘（1991）「自己開示からみた留学生と日本人学生の友人関係」『一橋論叢』105(5)、pp.629-647.

Jourard, S. M., ＆ Laskow, P., (1958) “ Some factors in self-disclosure.” Journal of Abnormal and Social Psychology . 56.